

研究紀要

【研究主題】

持続可能な社会を担う

児童の課題解決力の育成

～地域の人・自然・社会とのつながりを通して～



日野市立日野第八小学校

学校Webページアドレス

<http://www.e-hino8.hino-tyo.ed.jp/>

目次

あいさつ	2
研究構想図	3
研究の概要	
1 主題設定の理由	4
2 研究主題に迫るための手だて	6
3 研究経過	11
4 実態調査の結果と考察	13
5 研究の成果と課題	15
実践事例集	
第1学年 「生活科」	17
第2学年 「生活科」	30
第3学年 「総合的な学習の時間」	43
第4学年 「総合的な学習の時間」	55
第5学年 「総合的な学習の時間」	68
第6学年 「総合的な学習の時間」	82
第6学年 「外国語」	95
たちばな学級「総合的な学習の時間」	106
おわりに	118

挨拶

日野市教育委員会教育長 米田 裕治

本校では、令和元・2年度東京都教育委員会持続可能な社会づくりに向けた教育推進校として「持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成」を目指し、授業改善、カリキュラム・マネジメント、校内環境の整備を視点として研究してこられました。

まず、授業を子供たちの主体的な学びとするため、生活科や総合的な学習の時間を中心に、「価値ある共通体験」と「子供の問いを生む学習過程」の充実に努められました。そして、地域の方々、自然、社会とのつながりを大切に実践を進める中で、教科等横断的な視点からE S Dカレンダーの改善、活用、学習内容の工夫といったカリキュラム・マネジメントも推進されております。

今年度は、児童が地域の川で遊び続けられるように、ゴミ拾いなどの自然を守る活動を進んで実践する姿や、市内の環境について調べた児童が、環境改善に向けた活動を発表するなどの活動が行われています。これらのまなびは、「SDG s」に代表される地球規模の課題を解決する意欲と実践する力をもった児童を育むと確信しています。本校の実践は「疑問や驚きから生まれる問いを大切にして、自分たちなりの方法で自分たちなりの答えにたどり着く過程を大切にする」という点で、第3次日野市学校教育基本構想に基づいた実践でもあります。また、本市は令和元年7月1日に東京都内で初の「SDG s 未来都市」に選定されました。本校の「SDG s」を踏まえた校内環境の整備や教育実践が、持続可能な社会づくりに資することを期待しています。

結びにこれまで本校の研究に御指導いただきました、講師の先生方、研究を推進された松永式子校長先生をはじめ教職員の皆様、そして日頃から本校の教育活動に御協力いただいております保護者、地域の皆様に心より感謝申し上げます。

はじめに

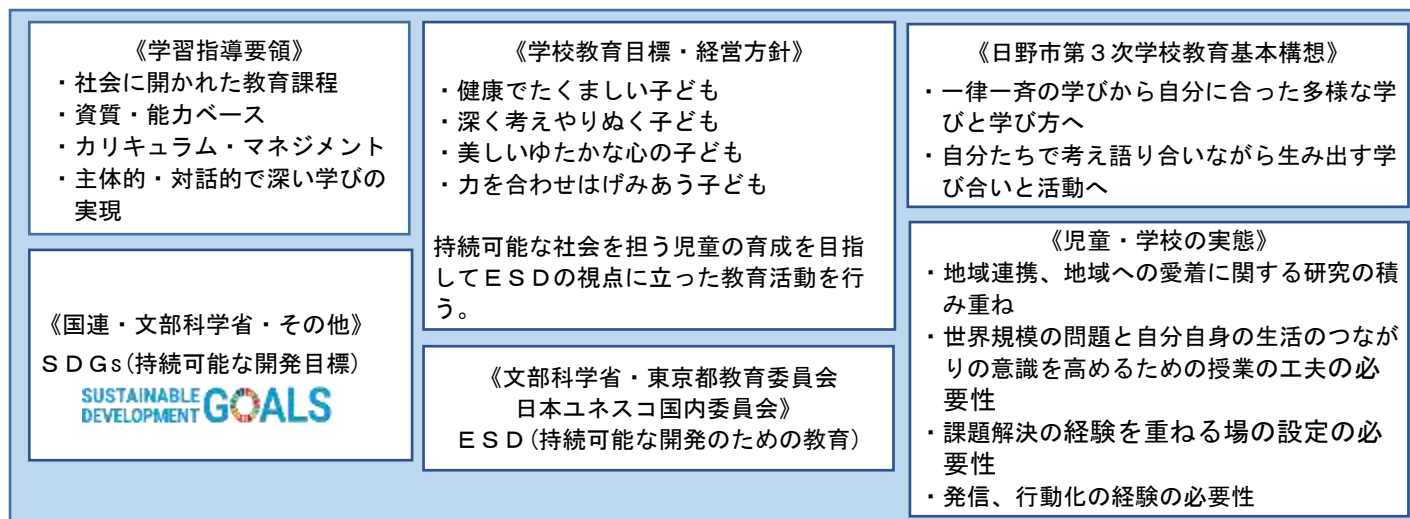
校長 松永 式子

本校は、令和元・2年度の2年間 東京都教育委員会「持続可能な社会づくりに向けた教育推進校」として、「持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成」に取り組んできました。

今年度は、昨年度の「地域を生かした学習」の中で、E S Dの資質・能力を育むことから一歩進み、児童に学びの必然性をもたせることはそのままに、児童が人・自然・社会との関わりの中で自ら課題を解決する意欲と力の育成に重点をおきました。地域と児童自身との関わりを重ねるごとに児童の関心が高まり、今までは当たり前に思っていたことに改めて興味のスポットライトを当てたり、「この問題解決のために、自分も何かしたい」と思ったりする姿が見られました。児童が知恵をしぼり、友達や先生と話し合い、様々な手段を講じながら解決に向けて取り組む姿が見られたことはとても喜ばしいことでした。ただ、その児童の行動や意欲・思考・意識の変容について、授業者が十分な視点をもって適切に評価をすることが大きな課題でした。大きな課題でした。指導と評価の一体化の必要性は、学習指導要領にも明示されています。学びを通じた児童の姿を客観的に評価することで、教師は児童への学習効果・教師自身の指導の成果を再認識することができます。今年度の研究では、評価規準を明確にし、毎時間の授業を大切にするを特に重視しました。教師自身も協働しながら、教材研究し、授業を作り上げていくことができたことも大きな成果だと感じています。

最後になりますが、私たちの研究を励ましながらい指導し支えてくださった、東京都多摩教育事務所指導課嶺井勇哉先生、辻泰成先生、東京都教育委員会、日野市教育委員会の皆様に深く感謝申し上げます。

研究構想図



【目指す児童像】

人・自然・社会とのつながりの中で自ら課題を見付け、解決できる子

低学年	中学年	高学年	専 科	たちばな・ステップ
人・自然・社会とのつながりの中で町のすてきなところを見付け、楽しむことができる子	人・自然・社会とのつながりの中で課題を見付け、自分なりに解決しようとする子	人・自然・社会とのつながりの中で自ら課題を見付け、解決できる子	課題解決型学習での学びを基に専科の特性に合わせて自ら表現できる子	人・自然・社会とつながる体験や活動を通して、互いのよさに気付き、楽しむことができる子

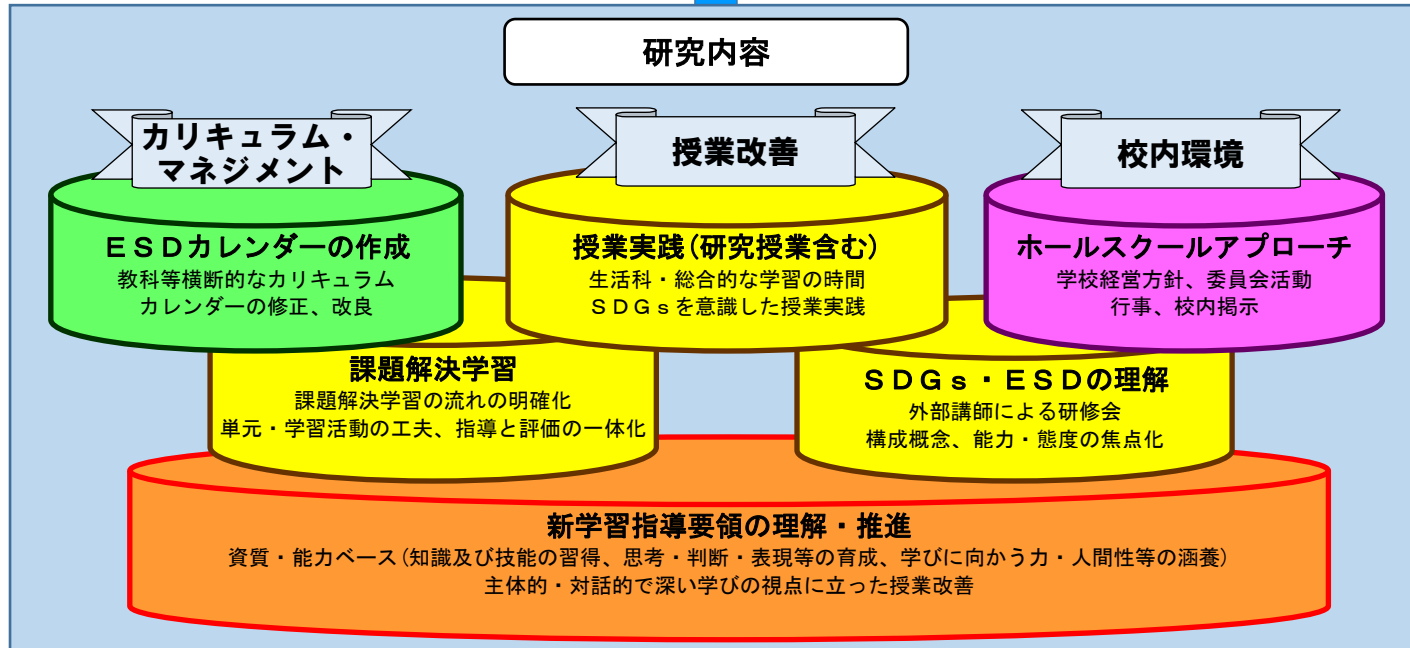
研究主題

持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成
～地域の人・自然・社会とのつながりを通して～

研究仮説

SDGsの視点を持ち、ESDの構成概念を活用させながら地域をフィールドにした課題解決学習を行うことで、持続可能な社会を担うための能力・態度を身に付けることができるだろう。

研究内容



研究の概要

1 主題設定の理由

2015年の国連サミットで持続可能な開発目標、SDGs (Sustainable Development Goals) が採択された。SDGsとは、持続可能な社会となるために2030年までに世界で達成すべき17の目標のことで、開発途上国のみで取り組むのではなく日本を含めた先進国も取り組むことが求められている。そして、このSDGsの視点を教育に取り入れるESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) を推進していくことは、学校教育における社会の要請であると言える。

そのような社会の流れの中で新しい学習指導要領が令和2年度より全面実施となったが、学習指導要領でも「持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力」を身に付けさせることが明記されている(学習指導要領第1章総則第1の3等)。また、学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントの必要性、また知識・技能だけでなく資質・能力ベースの学力観への転換が示されており、国際社会において共通認識されている「持続可能な社会を担う人材の育成」と「社会全体でのSDGsに向けた取組」について、学校教育はどのような役割を担うべきかが問われている。そこで、本校ではESDを学校教育の中心に据え、研究を進めていくこととした。

平成31年3月に策定された日野市第3次学校教育基本構想では、子供たち自らが育んでいく力を「すべての“いのち”がよろこびあふれる未来をつくっていく力」としている。「未来をつくっていく力」を「持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力」と捉えれば、これらの考え方はまさに本校が進める研究の内容と重なるものである。

本校では4年前より「地域に愛着をもつ子の育成」をテーマに研究を進めてきたが、その研究の過程で児童の資質・能力を体系的に育成することが課題としてあがった。そのような中でSDGsやESDの考えのもと、「地域」とつながる教育活動を大切にしながら児童の課題解決力を育成することを目指すことがこれまでの研究を発展させ、より価値あるものになると考えた。ESDを推進していく上で「Think globally Act locally」という考え方があるが、本校では、児童にSDGsの視点をもたせることで「Think globally」で学びが進み、地域をフィールドにして学習を行うことで自分と社会とのつながりが意識でき「Act locally」へとつながり、それが持続可能な社会を担う児童の課題解決力の育成につながるものと考えた。

副主題は「地域の人・自然・社会とのつながりを通して」とした。自分にとって身近である地域との「つながり」の中で、課題解決学習を進めていくことで児童がより自分事で課題を捉え解決への意欲を高めたり、思考を深めたりすることができると思った。学区内には多摩川、浅川、程久保川、七生丘陵の里山、農業用水などの豊かな自然や、どんど焼きなどの文化伝承がある。これらの地域をフィールドとし、郷土に対する誇りや豊かな自然への愛情を育むとともに、持続可能な社会の担い手として必要となる、課題解決の力の育成を図りたい。

【世界・社会的な背景】 Society 5.0時代・予測不能な未来・SDG s の達成

SDG s （持続可能な開発目標）

ESD （持続可能な開発のための教育）

☆これまでの研究内容との関連

平成 29・30 年度研究主題

「地域に愛着をもつ子の育成～地域と豊かに関わる活動を通して～」

成果

身近なフィールドでの学習

→主体的な学びの実現

地域の良さを再認識

→自己肯定感と郷土愛の醸成

課題

具体的な資質、能力の分析と育成

→ **ESDの推進**

令和元・2 年度研究主題
「持続可能な社会を担う児童
の課題解決力の育成
～地域の人・自然・社会との
つながりを通して～」

日野市第 3 次学校教育基本構想
（令和元年度～）

「すべてのいのちがよろこびあふれる未来をつくっていく力」

小学校学習指導要領全面实施
（令和 2 年度～）

「持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力の育成」

2 研究主題に迫るための手だて

(1) カリキュラム・マネジメントの推進

新学習指導要領の中で「各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。」（総則 第2教育課程の編成 2教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成）と述べられているとおり、それぞれの教科等のつながりを意識しながら学習活動を展開していくことは、児童に重点的に育みたい資質・能力を育成するために必須の方策であるといえる。また、E S Dは本来、環境、経済、社会の統合的な発展を目指したものであり、関連する様々な分野を「持続可能な社会の構築」の観点からつなげることが大切である。そこで本校では学習内容などを内容的・空間的・時間的につなげる「E S Dカレンダーの作成」と「総合的な学習の時間や生活科の学習テーマの設定」という2視点でカリキュラム・マネジメントを推進した。

① E S Dカレンダーの作成によるカリキュラム・マネジメント

E S Dカレンダーを作成、改善していくことは、総合的な学習の時間のみならず、各教科等の学習の充実にもつながる。教科書の配列にこだわることなく、単元構成を検討していくこと、また学習内容の共有化、連携化を図ることで、教科等横断的な学習を行うことができるようになる。

ア 学校行事や各教科等の系統性を鑑みて各教科等の単元配列を組む。

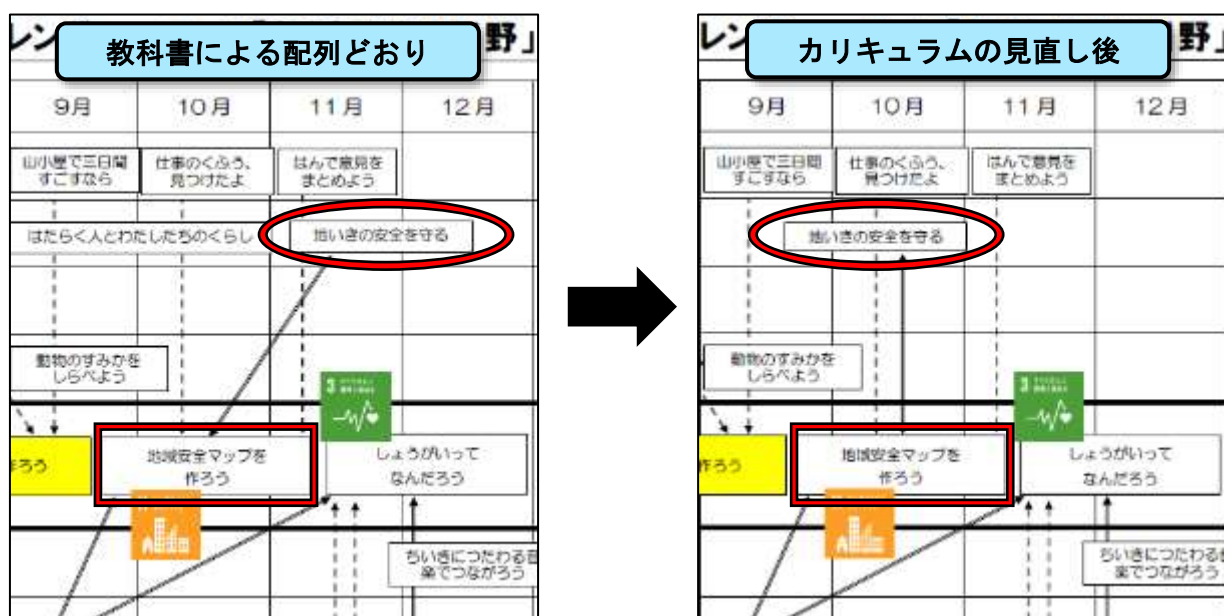
イ 総合的な学習の時間の単元の配列を考える。各教科等について配列を変えられる単元について、学習内容に関連があるものの学習時期をそろえる。

ウ 関連のある学習材のつながりだけでなく、学習スキルについても関連するものは揃える。

エ 総合的な学習の時間の学習内容についても、各教科等の内容から、修正を行う。

オ 実施後、年度末に再度、修正を行い、次年度の計画を立てる。

E S Dカレンダーはこのようなカリキュラム・マネジメントを行っていくためのツールであり、修正、改善を繰り返していくことが大切であると考えている。



【資料：第3学年E S Dカレンダーより】

例示した第3学年の場合、総合的な学習の時間の単位「地域安全マップをつくろう」が時期を移動できなかったため、社会科の「安全な暮らし」を「はたらく人々とわたしたちの暮らし」の時期と交換した。社会科で交通事故や事件、火事などについて学習する中で、自分たちが事件に巻き込まれないようにするためにどうすればよいかという課題を設定し、総合的な学習の時間で地域安全マップをつくるという学習につなげた。

② 6年間の学習テーマを設定

世界	6年	「よりよい未来を目指して」 (平和・教育・国際理解)
	5年	「わたしたちの環境を守ろう」 (環境)
	4年	「わたしたちと水」 (環境・生活)
	3年	「わたしたちの日野」 (環境)(福祉)(伝統文化)
	2年	「見つけよう自分のいいところ」 (身近な環境・農業)
	1年	「つながろう！わたしたちの町」 (身近な環境・ふるさと)
身近	1年	「レッツゴー！あさかわ」 (身近な自然・遊び)

- ・学年で総合的な学習の時間や生活科のテーマを設定し、単元同士のつながりを意識して、年間を通してテーマに沿った学習を展開した。
- ・そのことで学年の発達段階に合わせ、身近なところから世界的視野で取り組むカリキュラムとなり、学校全体として系統的な指導を行った。

(2) 学校の教育活動全般でSDGsやESDの概念を浸透させるための活動(ホールスクールアプローチ)

- ・朝会や集会での講話や委員会活動、また学校行事の中でSDGsやESDの概念を浸透させるための活動を位置付け、計画的に行った。⇒単なるSDGsの17の目標の学習ではなく、あくまでもESDを推進していく(児童の課題解決力の育成)ツールとしてSDGsを扱った。
- ・教室や廊下などの環境を整備して、掲示物による啓発を行った。



全校朝会での講話



パトラライアスロン体験会



全教室にSDGsのロゴとアイコンを掲示



代表委員会による「命の本」の読み聞かせ

(3) 総合的な学習の時間と生活科を中心とした授業改善（八小の授業改善6視点）

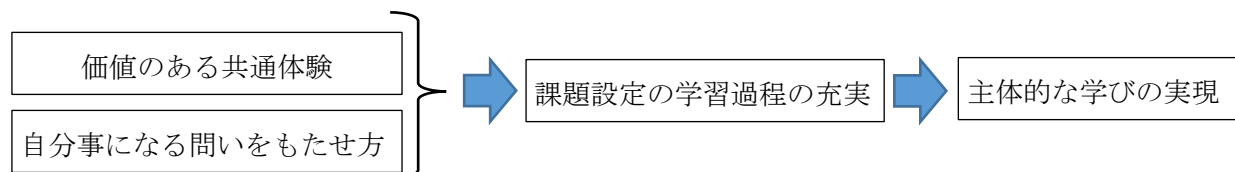
①課題解決学習の流れの明確化と実践

総合的な学習の時間や生活科における課題解決学習（生活科では課題解決につながる学習過程として設定）の流れを全校で共通理解し、それぞれの学習過程を確実に実践・充実させることで単元全体の学習が深まると考えた。



②「課題設定」の学習過程の充実

- ・児童に驚きや疑問が生まれるような価値のある共通体験と自分事になる問いをもたせることで課題設定の学習過程が充実し、主体的な学びが実現すると考えた。



「みんなはどう思う？」
「どんなことをしたい？」
「これからどうしよう？」



「興味がわいてきた」
「調べてみたい」
「解決しないとだめだ」

第5学年共通体験「JICA出前授業」

③地域人材・外部人材を活用した授業づくり

- ・児童が自分事で考え、意欲的に自己の課題を解決できるように地域の人材や自然を積極的に活用した。



「自分たちの住む地域にはこんな素敵なところがあったんだ。」
「自分たちの住む地域のよさを守っていききたいなあ。」
「自分たちの住む地域の問題は自分たちで解決しないとなあ。」

第4学年「日野市役所緑と清流課による出前授業」

④「情報の整理・分析」の学習過程の充実

- ・思考ツールの活用と対話的な活動の工夫によって、より充実した対話的な学びが実現し、学習が深まると考えた。



第2学年「Tチャートの活用」



たちばな学級「カードを使って役割を決めている様子」

⑤地域とのつながりの中での行動・検証を意識した単元計画

- ・E S Dの視点から、児童の課題解決力を育成する上で「課題を解決するために実際に行動してみる」ことが大切なことだと考え、単元の学習過程の中に最後に位置付けた。そして高学年では、自分たちの行動を「検証」し、よりよい行動へと修正することを学習のゴールとして設定した。



第3学年「おもてなし交流会の様子」



第4学年「地域の人に用水について発表している様子」



第6学年「ユニセフ募金の様子」

⑥単元における評価の充実（課題解決力の評価規準の策定と評価方法の検討）

- ・児童の課題解決力を育成するために、総合的な学習の時間や生活科の単元の中でそれぞれの学習過程において、教師が児童にどんな力を身に付けさせ、児童がどのような姿になればよいか明確に意識することが大切だと考えた。（指導と評価の一体化）
- ・総合的な学習の時間や生活科の単元の中で、E S Dの構成概念と課題解決のための資質・能力を明確に位置付け、意識して指導していくことが必要だと考えた。



☆評価計画の充実（詳細な評価規準の策定及び想定される児童の姿の設定とその支援の検証）

（第5学年「わたしたちの環境を守ろう」学習指導案から抜粋）

学習過程	評 価 規 準		
	知識・技能【知】	思考・判断・表現【思】	主体的に学習に取り組む態度【学】
課題設定	ア 世界の中に様々な環境問題があることを理解している。（相互性）	ア 思考ツール「ウェビングマップ」を用いて自分で課題を設定している。 イ 学習の見通しをもちながら自分なりに学習計画を立てている。 （多面的、総合的に考える力）	ア 自分で課題を設定し、探究活動に進んで取り組もうとしている。（進んで参加する態度） イ 自分にできることかどうか整理し、学習計画を立てようとしている。
情報収集	イ 環境問題について、手段を選択しながら情報を収集している。	ウ 自分で調べたことと関連させながら、企業の取組を聞き、理解している。	ウ 進んで調査活動に取り組んでいる。（進んで参加する態度）

（第1学年「レッツ・ゴー・あさかわ」学習指導案より抜粋）

	想定される児童の姿	支援
A	・自分や友達の気付きの良さについて、理由を明確にした上で気付いている。	・絵と文章を結び付け、更に明確な理由とするとよりよいことを助言する。
B	・自分や友達の気付きの良さに気付いている。	・どの部分の表現がよい気付きのなのか、理由を明確にしながらかえるとよいことを助言する。
C	・自分や友達の気付きの良さに、漠然と気付いている。	・色、模様、数、感想等の部分に注目して考えるとよいことを助言する。

3 研究経過

(令和元年度)

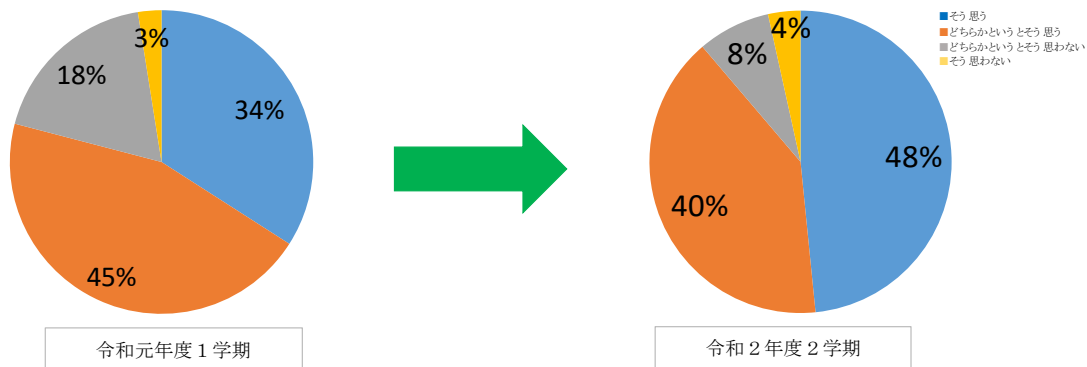
4	5	金	研究主題 研究の方向性について
5	8	水	講義 「西田小学校の持続可能な社会づくりに向けた教育推進校実践」 本校研究の進め方について、指導・助言 講師 足立区立北鹿浜小学校 副校長 新井 雅晶先生
5	29	水	講義 「SDGsについて」 講師 外務省外務省地球規模課題総括課 経済協力専門員 照屋 友紀様 講義 「東京都におけるESDの取組」 講師 東京都教育庁指導部指導企画課 指導主事 飯田 浩行先生
9	11	水	研究授業① 第6学年 外国語 単元名:「At this moment ～今のわたしにできること～」 授業者:宇井 幹主任教諭 講師:明星大学教育学部 教育学部教育学科 特任教授 阿閉 暢子先生
10	23	水	研究授業② 第2学年 生活科 単元名:「町のすてき 大はっけん!」 授業者:藤田 紗彩教諭 講師:明星大学教育学部 教育学部教育学科 特任教授 阿閉 暢子先生
11	27	水	研究授業③ 第4学年 総合的な学習の時間 単元名:「水問題について考えよう」 授業者:井川 龍人教諭
1	22	水	研究授業④ 第6学年 総合的な学習の時間 単元名:「世界の子供たちと未来をつくる」 授業者:萩原 農主幹教諭 講師:羽村市立松林小学校 副校長 岡元 大輔先生 講師:明星大学教育学部 教育学部教育学科 特任教授 阿閉 暢子先生
2	26	水	中間発表会「新型コロナウイルス感染症拡大により非公開にて実施」 第1学年 生活科 単元名「はっけん!あさかわたんけんたい」 第2学年 生活科 単元名「わくわくワンダーランド～町のすてきを見付けよう」 第3学年 総合的な学習の時間 単元名「まちの人たちが“受け継ぐ”行事」 第4学年 総合的な学習の時間 単元名「わたしたちの水」 第5学年 総合的な学習の時間 単元名「わたしたちの環境を守ろう」 第6学年 総合的な学習の時間 単元名「世界の子供たちと未来をつくる」 特別支援 総合的な学習の時間 単元名「みさわマイスターになろう」 専科 外国語科 単元名「I like my town.自分たちの町・地域」 講師:明星大学教育学部 教育学部教育学科 特任教授 阿閉 暢子先生 講演会講師:写真家 長倉 洋海氏 演題「世界の子供たちと共感し合える心を育む」

(令和2年度)

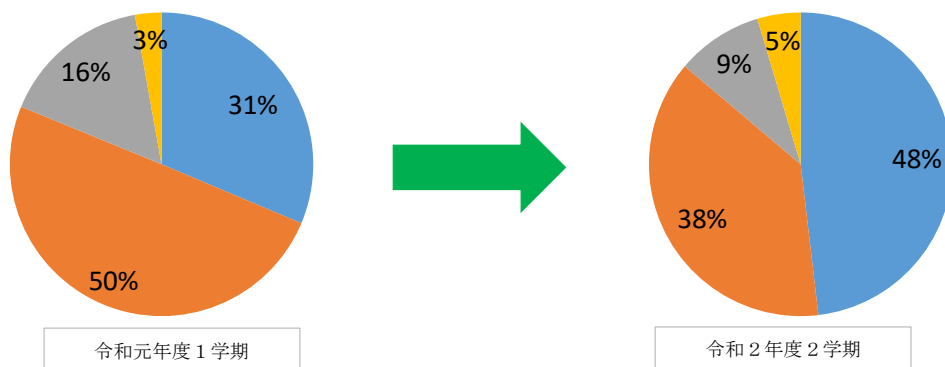
4	9	木	研究主題 研究の内容
5	11	月	研究授業日程 指導案について
5	26	火	今年度の重点 指導案について 研究の内容 研究発表会について
7	14	火	研究授業① 第6学年 総合的な学習の時間 単元名:「よりよい未来を目指して」 授業者:鈴木 明子主任教諭 講師:多摩教育事務所指導課 指導主事 嶺井 勇哉先生
7	31	金	研究授業② 第5学年 総合的な学習の時間 単元名:「わたしたちの環境を守ろう」 授業者:市川 希主任教諭
9	3	木	研究授業③ 第4学年 総合的な学習の時間 単元名:「用水について考えよう」 授業者:大代 卓主任教諭
9	9	水	研究授業④ 第3学年 総合的な学習の時間 単元名:「八小のまわりの生き物を調べよう」 授業者:真野 尚人教諭 講師:多摩教育事務所指導課 指導主事 嶺井 勇哉先生
9	25	金	研究授業⑤ 第2学年 生活科 単元名:「つながろう!まちのすてきたんけんたい」 授業者:吉田 美津穂教諭
10	14	水	研究授業⑥ たちばな学級 総合的な学習の時間 単元名:「いろいろな国について知ろう」 授業者:(T1) 齋藤 健介教諭 (T2) 湯田 正樹主任教諭 (T3) 奥野 藍教諭 (T4) 唐橋 恭子教諭 講師:多摩教育事務所指導課 指導主事 嶺井 勇哉先生
10	20	火	研究授業⑦ 第6学年 外国語(専科分科会) 単元名:「I like my town.」 授業者:洞口 早希教諭
10	21	水	研究授業⑧ 第1学年 生活科 単元名:「レッツ・ゴー・あさかわ!」 授業者:有水 洋一主任教諭 講師:多摩教育事務所指導課 教育専門員 辻 泰成先生
11	11	水	研究授業まとめ
1	7	木	研究発表に向けて
1	20	水	今年度の研究の反省と総括
2	24	水	研究発表(紙上)
3	17	水	来年度に向けて・来年度の研究計画提案

4 実態調査の結果と考察

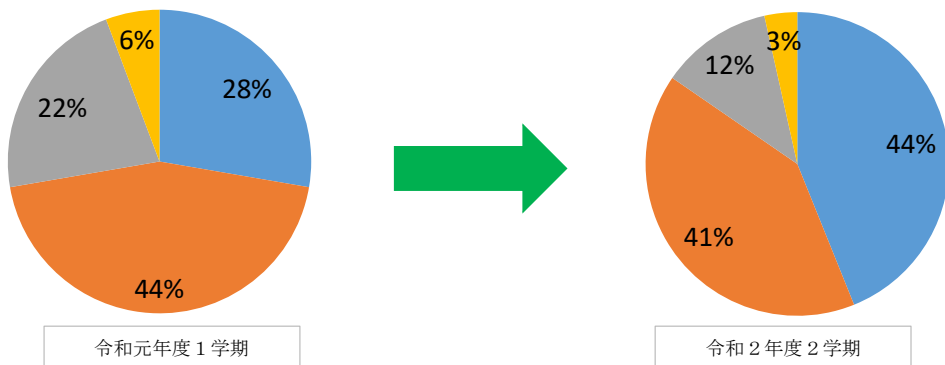
質問1 授業の中で友達や先生と話し合うことで、自分の考えが広がったり深まったりしている。



質問2 授業の中で学んだことをいくつかつなぎ合わせて、自分なりの考えをもつことができています。



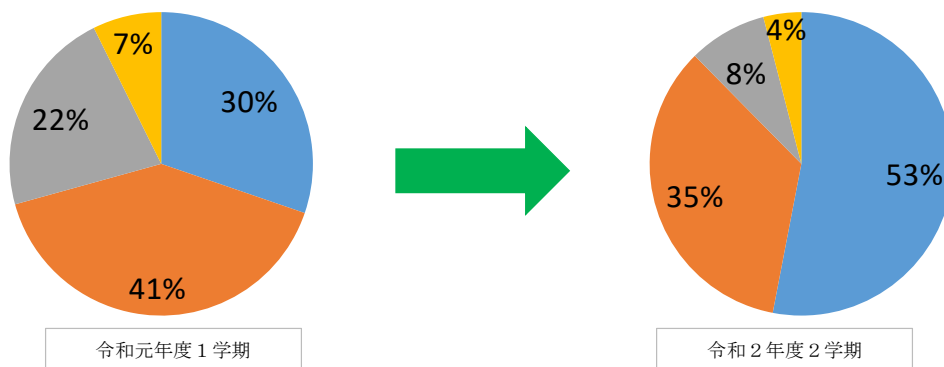
質問3 授業の中で、自分で課題を見付けて解決策を考えるようにしている。



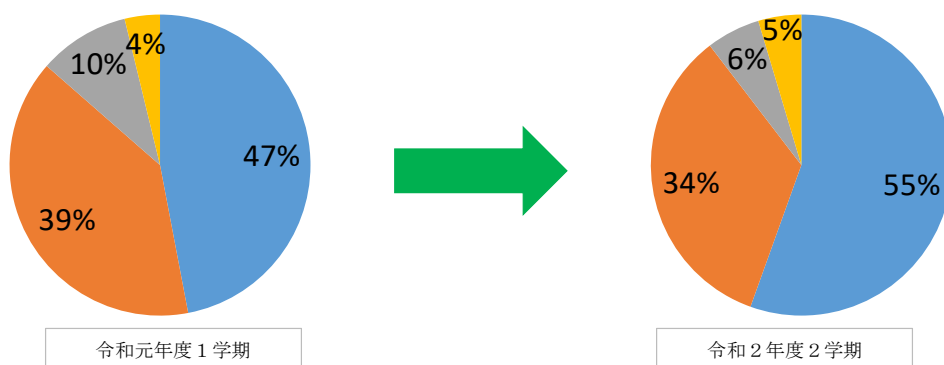
質問4 自然環境や地域、地球全体の課題は、自分にとって身近な課題だと思う。



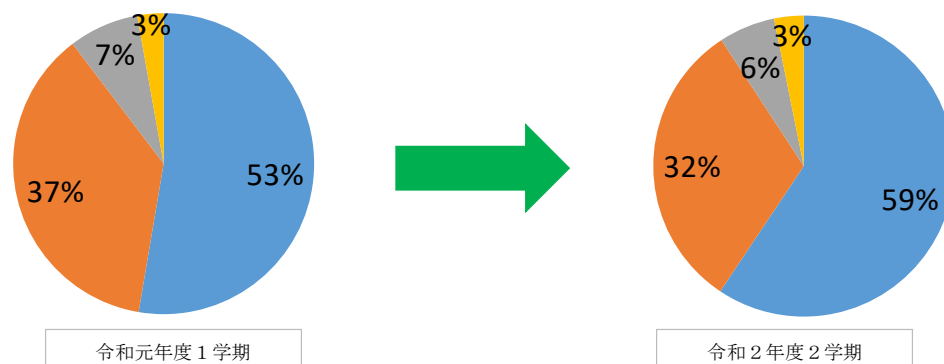
質問 5 自分たちの行動は、地球の課題を解決することにつながっていると思う。



質問 6 持続可能な社会をつくるために、社会の役に立ちたい。



質問 7 他の人と協力して、持続可能な社会をつくっていききたい。



【結果】

- 全ての設問に対して肯定的な回答の割合が増えている。
- 課題解決的な学習に関する設問 2 及び 3 では肯定的な回答をした児童の割合が約 15 ポイント向上した。
- 設問 5 「自分たちの行動は、地球の課題を解決することにつながっていると思う。」という設問に対して肯定的な回答をした児童が約 20 ポイント向上している。

【考察】

- 全ての設問に対する肯定的な回答の割合の増加していることから、2 年間の研究が一定の成果をあげることができたといえる。特に課題解決的な学習に関する設問に対する肯定的な回答の伸びから、総合的な学習を中心とする課題解決的な学習が浸透し、児童の意欲や思考力を高めることができた。
- また、質問 5 「自分たちの行動は、地球の課題を解決することにつながっていると思う。」が 20 ポイントくらいの高い伸びを記録したことから、授業改善の視点として「行動化」を単元のゴールとして設定してきたことが、児童の意識を変えることにつながったといえる。

5 研究の成果と課題

研究の成果

【SDG s の視点をもたせた課題解決学習を充実させるための手だて】

- 1 カレンダーの作成と活用による実践的なカリキュラム・マネジメントの推進。
- 2 学年テーマの設定による、大きな目標を見据えた各教科等の学習の連携。
- 3 様々な機会にSDG s に親しむホールスクールアプローチによる、児童主体の活動が活性化。
- 4 課題解決の流れを明確化した、生活科、総合的な学習の時間を中心とした授業改善。



【持続可能な社会を担うための能力・態度の習得】

- 課題設定や解決のための学習計画を立てる力が身に付き、目的意識をもって学習できた。
- 思考ツールを活用して、調べたことをまとめ、整理・分析をする経験を通し、物事を多面的に考えたり、批判的に考えたりする力が身に付いた。
- 学習過程においてコミュニケーションの力を高め、他者との対話を通して協働する態度が身に付いた。
- 課題設定から行動化までの道筋が分かり、自分事として解決しようとする意欲が高まった。
予測のできない将来の社会において、新たな課題に主体的に対応する基礎を養うことができた。

今後の課題

- ▲ESDカレンダー…児童の実態や学習の内容に応じて、柔軟に捉え、必要に応じて見直しや修正、年度更新をしていくことで持続可能な学習計画とする。
- ▲思考ツール…児童がより考えやすくするための道具であり、使うことを目的とするものではない。題材や場面に応じて児童が自ら選んで使えるよう、整理、提示の方法を工夫する。
- ▲指導と評価の一体化…評価規準を踏まえた授業改善と児童の見取りを更に追求する。
- ▲SDG s の17のゴール…地球規模の課題と児童の身近な地域での活動をつなげるシンボルとして、児童の学習や行動への意欲を高めるための工夫が必要。
- ▲課題の解決と行動化…課題解決の力を支える豊かな体験や汎用性のある知識や理解の積み上げを、他教科等や生活科等で培い、「価値ある行動化」につながる学習展開を追求する。